

中国文芸研究会 2013 年度総会議案書

中国文芸研究会は、年二回、二月と八月に研究誌『野草』を、年十一回、『中国文芸研究会会報』（以下『会報』と略）を刊行し、年十回の例会を開催している。さらに夏期合宿を企画し、有志による「映画の会」や「書評の会」も運営されている。科研と連動した 40 年代文学の研究会も立ち上がっている。また、若手中心の「中国モダニズム研究会」も活発な研究活動を展開している。このように、近年、研究会の活動が、従前に較べても活発になり多様化していることは間違いないだろう。

一方、常態化するマンパワーの不足は、にわかには改善する見込みはない。会員数は一時期右肩上がりだったが、近年では、ほぼ横ばい状態が続いている。また、会員も年々忙しくなる一方で、様々な分野で研究業績が数値化され、目に見える成果が求められるようになった。

こうした状況のもと、学会組織とは異なる民間の研究団体が、会費と純粋な意欲だけに支えられて活動を維持してゆくには、これまで以上に実質的な事務局体制の整備と、学会や研究機関の活動とは一定程度差別化された、独自の研究活動の提案が求められるだろう。とは言っても、実際に行うべきは、腰をじっくり据えた、息の長い、着実な研究活動である。

研究活動を支える会費は、管理の宜しきを得て会員から滞りなく納入されている。

また、実際の研究活動については、以下に記すように、各セクションにおいて工夫がこらされ、活性化がはかられている。年十回の例会参加者数が一定数を確保できている現状もその成果であろう。こうした活動を『野草』や『会報』の紙面に極力反映させ、課題を広く会員と共有しあえるよう、今年も研究会の運営に努めてゆきたい。

I. 2012 年度活動報告

*会員数は 243 名（2013 年 4 月現在）。前年度より僅かに減少した。

*運営面では、事務局の役割分担がほぼ定着し、円滑な研究会活動が行われた。今後は事務局体制を維持・更新してゆく人材の確保・育成が大切になるだろう。

*以下、各セクションごとに活動状況を報告する。

(1) 『野草』刊行（担当：黄英哲・星名宏修・高橋俊）

*第 90 号（2012 年 8 月 1 日刊行／編集担当：黄英哲・星名宏修／版下担当：平坂仁志）および第 91 号（2013 年 2 月 1 日刊行／編集担当：高橋俊／版下担当：中野徹）を予定通り刊行することができた。

*90・91 号についても、これまで通り例会・合宿で報告・討論の後に『野草』に投稿という基本方向は継続されたが、報告に基づく論考以外の投稿も少なくなかった。

*90 号の合評会は台風接近のため会場が使用できず、12 月まで延期された。異例の事態

とはいえ、今後も起こりうることであり、事前に対応策を考えておく必要があるのではないか。

*昨年度の総会議案の記述通り、『野草』編集に関わる中長期的な計画に基づき編集担当者が決められ、編集・刊行が順次進められた。

*『『野草』編集の手引き』の改訂や『野草』の投稿規定の整備は今後の課題である。

(2)『会報』発行(担当:永井・三須)

*前年に引き続き2012年度も、永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとして活動し、2012年4月号(366号)井上薫、5月号(367号)佐原陽子、6月号(368号)島由子、7月号(369号)津守陽、8月号(370号)大野陽介、9月号(371号)和田知久、10月号(372号)田村容子、11月号(373号)上原かおり、12月号(374号)小笠原淳、2013年1月号(375号)羽田朝子、2月3月合併号(376+377号)三須祐介、4月号(378号)島由子がそれぞれ編集を担当した。

*各月とも期日どおり順調に出すことができた。

*印刷費の関係もあって設定された「ひと月あたり12頁を限度とする」という原則は守られた。

*編集担当者がPDFを作成しメールマガジン版を配信した。

*遠方等の事情でやむを得ない場合をのぞき、会報担当者が会報発送にも立ち会い、執筆者分の送付などに気を配り、編集から発送までの過程の責任をもつという形で担当号に対する責任を果たした。

*「交流」欄の編集については、事務局員が情報を随時事務局MLに挙げ、それが主な情報源となった。

*「例会記録」は、基本的に報告者によるレポートを掲載した。

*『会報』メールマガジン版登録者は、現在のべ104人である。

*会報印刷費は木村桂文社からの請求に応じてその都度リーダーが立て替えて支払った。13年度はじめに清算する。

*例会のない2月発行の会報を3月号との合併号とし、ページ数も増やして24頁以内で小特集を組む、という試みを、前年度に引き続き行った。

*合併号の担当者の決定、会報作成上の問題点、今後の会報担当者の活動、翌年度の総会議案書の作成などについての相談のために、1月例会日の午前中に「会報担当者懇談会」を行った。その際、以下のようなことを話し合ったほか、本議案書の「活動方針」も、その内容をもとに作成している。

① 昨年度の懇談会での決定を受け、会報MLを作ったため、手の空いた者が版下をチェックできるなどのメリットがあった。(複数意見)レイアウトがずれることがあるので、チェックの際、版下をPDFでMLに上げる。可能なら、文字は「画像として埋め込み」機能を使う。

② 現在、連載も複数あり、原稿が順調に集まっていることはありがたい。「反響」コーナ

ーを作るなどの効果があったためではないか。

- ③ 引き続き会報紙面で原稿を募集してゆく。
- ④ 「反響」を多くの会員に気軽に書いてもらいたい。「ご感想」の募集文面にしてはどうか。
- ⑤ 京都・大阪とも、会報発送の手順を明確に文書化する必要がある。発送担当者（京都＝永井、大阪＝大野）が不在でも、発送をスムーズに行えるように、「会報発送の手順」を作って会報マニュアルに入れるとともに、例会会場で参照できるように、クリアケースなどに入れて発送グッズと一緒に保管するのがよい。
- ⑥ 会報担当者懇談会は、今後も1月例会の午前中にもつ。
- ⑦ 京都会場で使っている会のハンコを新しいものにして欲しい。シャチハタがよい。

(3) 「例会」開催 (担当：濱田)

今年度は、担当者が例会に参加するようになって初めての休会があった。九月例会ではもともと午前中にゲストの黄錦樹氏の講演会を催し、午後からは『野草』90号合評会が予定されていたのだが、台風による警報のために休会とせざるを得なかった。決定にあたってはネット上で事務局が慌ただしく回り持ち会議を行い、メールで拡散するという方法をとったが、会場で待ってくださった会員もいた(幸いにも黄錦樹氏を囲むことができたが)。今後も同じような天災が起こりうるので、会場がある場所に警報が発令された場合は、事務局で速やかに休会するか否かを決定してMLで流すことにしたい。

このため、2012年度は12月の通例である書評を行わずに『野草』90号合評会とし、例会数は年間で合計9回となった。通常の研究報告のほかに、4月例会では梶谷懐氏(神戸大学経済研究科准教授)に講演「現代中国の経済社会と「公共性」」をお願いした。また、長い間この会の代表をつとめてくださった太田進先生が2012年11月に逝去されたため、2013年1月例会は太田先生をしのぶ会を行った。この1月例会に50人をこえる参加者が集まったほか、例会の参加者人数は平均して20人余りであった。昨年度は『野草』編集担当が積極的に報告者を集めてきてくれたこともあり、比較的早い時期に例会内容を決めることができた。「例会報告→『野草』掲載→例会での合評」という流れもほぼ保たれていたように思う。

(4) 「夏期合宿」 (担当：大東)

*夏期合宿(担当：大東和重)は、9月2日～4日の3日間にわたり、兵庫県神戸市の元町にて開催した。参加者は48名(うち宿泊33名、日帰り参加15名)。近年合宿では特集を組んでおり、2012年度の特集は、文芸研有志による中国モダニズム研究会の協力を得て、「中国モダニズム特集」であった。中国モダニズムの作品を読む、『上海モダニズム』の著者鈴木将久氏を招いての書評、モダニズムを知るための書評集と、密度の高いプログラムであった(2012年度から自由発表は初日に開催)。交通便利な神戸での開催ということもあり、例年以上に参加者が多く、充実した3日間となった。

(5) 「書評の会」 (担当：松浦)

*松浦恆雄(責任者)・今泉秀人・西村正男が中心となって、4月・6月・10月の例会前の

午前中に開催した。毎回担当者が報告したあと、出席者による意見交換を行った。新刊書・論文などの情報交換もフリートークで行った。参加者は多くなかったが、最新の研究成果に触れる活性化の効果は十分にあった。

*他の研究活動とのリンクの仕方や『会報』への反映のさせ方などを引き続き検討した。

(6)「映画の会」(担当：菅原)

*今年度は外部団体とのコラボレーションを企画した。2013年2月9日に、関西大学東西文化研究所比較映像文化班例会へ協賛する形で、ドキュメンタリー映画『ブロッキーを探して』(2009)の上映、および文芸研メンバー2名による研究発表を行った。詳細は文芸研ウェブサイト「映画の会」にある次のPDF文書を参照されたい(<http://c-bungei.jp/eiga/20130209eiga.pdf>)。映像学(映画史)研究者によるイベントとジョイントすることで、中国研究という領域を越えた視点から中国映画研究を逆照射することができた。

*映画の会のメーリングリストによる情報交換も継続された。特に、中国文学研究の領域では拾うことのできないアジア映画イベント情報等が回覧される機会や、科研関連研究会等比較的小規模の集会にかんする情報の投稿も少なくなかった。メーリングリスト参加者数は決して多くは無いものの、今後もより充実した情報交換を目指して広報を進めていきたい。

(7) 40年代文学“漂泊”研究会(担当：濱田)

*40年代文学“漂泊”研究会は「漂泊する叙事 1940年代中華圏における文化接触史」という課題名で2011年度末から三年間の基盤研究(B)に採択された。二年目にあたる2012年には、大阪大学の松本、宮原氏を招いて「漂泊(人の移動、文学的営為の移動)」にまつわる研究会を行ったほか、十月には台湾から黄錦樹氏を招き、四〇年代にまつわるテーマを含むいくつかの講演をしていただいた。さらに十一月には神戸大学にて「戦争と女性」と題した国際シンポを開催し、二日間にわたって討論をおこなった。

(8)「特別事業」計画(担当：宇野木)

*「特別事業」のあり方をめぐる議論を開始してきてはいるが、具体的な事業活動を行なうところまではいかなかった。

(9)「野草ネットワーク」(担当：青野)

*レンタルサーバーによる研究会のネットワーク運営が定着した。

URL=<http://c-bungei.jp/bungei.shtml>

E-mail=office[アットマーク]c-bungei.jp

*ウェブサイトは、菅原慶乃が中心となって管理・更新作業を行ない、充実した内容となっているが、ウェブサイトの重要性に比例して、担当者の負担が重くなってきている。

*事務局アドレス office[アットマーク]c-bungei.jp 宛のメールを事務局 ML に転送する作業は、2011年度より菅原・鳥谷の複数担当制へと移行した。これにより、転送処理の相互チェックがはたらき、転送ミスや対応漏れ等を防ぐことが可能となった。

- * 「野草 ML」(登録数のべ 81 件)は会員交流の場として、「事務局 ML」(登録数のべ 61 件)は運営に関わる意見交換や実務作業効率化の手段として重要な役割を果たしてきた。「野草 ML」は依然あまり活発ではないが、気軽な情報交換の場として、一定の活用がなされた。一部のメールアドレスにメールが配信されないトラブルは、若干改善された。
- * 『会報』メールマガジン(登録のべ 102 件)は、会員数に比して依然登録数が少ない。さらに登録を呼びかけることと、アーカイブ化の検討とが必要であると思われる。
- * 「交流データベース」を設置したが、『会報』の交流欄との連携がうまくいっていない。工夫が必要である。

II. 2013 年度活動方針

- * 事務局体制をしっかりと安定させ、研究活動の維持・向上に努める。
- * そのため、(1) 組織の維持管理を受け持つ会費管理・口座管理・事務局 ML、(2) 研究活動の発表や広報を受け持つ例会・会場予約・二次会予約・夏合宿・『野草』・『会報』・ウェブサイト、(3) 新しい研究活動の企画を受け持つ「書評の会」・「映画の会」・「40 年代文学“漂泊”研究会」・特別事業の三本柱ががっちり組み上がり、本研究会が十分に力を発揮できるよう、事務局・各セクションの役割分担を確認し、相互の連携を強めてゆきたい。
- * 大学院生を中心とする若手層および関西在住以外の会員にも、主体的、積極的な参加と役割分担を呼びかけるとともに、広く会員からの積極的な提言や取り組みを歓迎したい。
- * 研究活動の活性化には、例会報告や『野草』掲載論文などにおける研究水準の向上が不可欠であるが、そのためにも、これまで以上に多様な方法が試みられて良いだろう。以下、各セクションごとの活動方針を記す。

1 各種研究活動について

(1) 『野草』刊行(文責:松浦)

- * 『野草』の刊行は、研究会の中心事業である。刊行を継続することはもちろん、掲載論文の質を向上させたい。そのため、「例会報告→『野草』掲載→例会の合評会」という基本原則を守り、それぞれに充実させることを研究会活動の骨子とする。
- * 編集担当者は、従来通り、執筆予定者との連絡を密にし、さらに今後は例会担当者との連携もはかってゆく必要がある。
- * 編集担当者は「『野草』編集の手引き」を活用し、締切りを厳守することにより、投稿原稿の審査(査読)や版下作成を含む全ての編集作業が円滑に進むように努める。
- * 「『野草』編集の手引き」は、現状を踏まえて改訂する必要がある。
- * 今年度も『野草』編集に関わる中長期的な計画に基づき、編集担当者を決め、十分な余裕を持って編集作業が行えるよう努めなければならない。
- * 今後の刊行計画は以下の通りである。
- ・第 92 号=2013 年 3 月末原稿提出〆切、2013 年 8 月 1 日刊行。編集:中野徹

- ・第93号=2013年9月末原稿提出〆切、2014年2月1日刊行。編集：城山拓也
 - ・第94号=2014年3月末原稿提出〆切、2014年8月1日刊行。編集：田村容子〔サポート藤野真子〕
 - ・第95号=2014年9月末原稿提出〆切、2015年2月1日刊行。編集：小笠原淳〔サポート濱田麻矢〕
 - ・第96号=2015年3月末原稿提出〆切、2015年8月1日刊行。編集：鳥谷まゆみ〔サポート宇野木洋〕
 - ・第97号=2015年9月末原稿提出〆切、2016年2月1日刊行。編集：大野陽介〔サポート三須祐介〕
- * 『野草』の書店への卸作業、海外送付先への発送作業は好並晶、バックナンバーの管理は藤野真子の担当とする。

(2) 『会報』発行 (担当：永井・三須)

- * 編集担当体制は、昨年同様、永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとする。
- * 昨年度同様、紙媒体版とメールマガジン版の2本立てで発行し、例会の前に発送作業を行う。「例会」開催日程との関係から、昨年度同様、2月号は3月末に2月号・3月号合併号として発送する。
- * 誌面は原則として12頁までとする。原稿の依頼・採否等は各月編集者の裁量で行なうが、各月編集者が必要と考えた場合は、リーダー・サブリーダーに相談し、最終的には事務局の判断に委ねることもできる。なお、3月末発行の合併号については、24頁までとする。
- * 今年度の2月・3月合併号は大野が編集を担当し、通常の記事のほか、特集を企画する。特集についての詳細の発表と原稿の募集は12月号、1月号の会報で行う予定である。
- * 1月例会の午前中に「会報担当者懇談会」をもち、会報担当者が集まって、編集上の問題点、次年度の合併号の担当者、総会議案書の検討、今後の会報のあり方などについて、アイデアや意見を出し合う。その席での決定はその日午後の1月例会で報告し、事務局全体にメールリングリストで報告するとともに、その決定内容をもとに次年度の総会議案書「会報」の「活動報告」「活動方針」を書く。
- * 会報印刷費はあらかじめリーダーにあずけ、年度末に会計との間で清算をおこなう。
- * 編集担当は、基本的に担当者の希望に基づいて以下のようにする。

2012年4月号(378号)3月末原稿〆切・4月上旬編集作業・4月末発送=島由子

5月号(379号)4月末原稿〆切・5月上旬編集作業・5月末発送=豊田周子

6月号(380号)5月末原稿〆切・6月上旬編集作業・6月末発送=永井英美

7月号(381号)6月末原稿〆切・7月上旬編集作業・7月末発送=阿部沙織

8月号(382号)7月末原稿〆切・8月上旬編集作業・合宿会場で発送=中野徹

9月号(383号)8月末原稿〆切・9月上旬編集作業・9月末発送=羽田朝子

10月号(384号) 9月末原稿〆切・10月上旬編集作業・10月末発送＝田村容子
11月号(385号) 10月末原稿〆切・11月上旬編集作業・11月末発送＝和田知久
12月号(386号) 11月末原稿〆切・12月上旬編集作業・12月末発送＝小笠原淳
2013年1月号(387号) 12月末原稿〆切・1月上旬編集作業・1月末発送＝津守陽
2月3月合併号(388+389号) 2月末原稿〆切・3月上旬編集作業・3月末発送
＝大野陽介

4月号(390号) 3月末原稿〆切・4月上旬編集作業・4月末発送＝上原かおり

5月号(391号) 4月末原稿〆切・5月上旬編集作業・5月末発送＝河本美紀

6月号(392号) 5月末原稿〆切・6月上旬編集作業・6月末発送＝南真理

* 担当者は原則として編集から発送までの責任を負うこととし、担当月の会報を発送するときには立会い、執筆者分の封入、残部処理の確認などを行う。(急用など、または遠方のため立ち会えない場合は、京都会場は永井、大阪会場は大野がその代理をする。)

* 引き続き内容の充実・活性化を図り、「交流」欄を充実させる。全国の会員にも「野草ML」などを活用して研究情報をお寄せいただきたい。

* 「例会」記録は原則として「例会」報告者が執筆する。ただし4月例会(講演)、12月例会(書評)はその限りにあらず、あらかじめ記録者を決めておくことが望ましい。

* 印刷費削減のため、画像は原則として版下データに埋め込む。

* 海外研究機関・研究者への贈呈および海外留学生への配送サービスのあり方については、引き続き検討する。会報はPDF化されているので、海外研究機関に贈呈している会報の郵送を停止、メール配信に切換えることを、時期、通知方法なども含めて事務局で検討する。海外発送担当は好並晶とする。

* メールマガジンの運営は青野繁治が行い、PDFファイルの作成と配信は原則として各月の編集担当者が行う。

* 投稿者は原稿送稿の際、原則としてE-mail添付(原稿ファイルと印刷イメージPDF)とする。画像については、データを添付して配置位置を指示する。送られた原稿の返却は原則行なわないが、特別の事情があって返却を希望する場合は、その旨を申し出て、あて先を明記し切手を貼付した返信用封筒を同封すること。

【原稿送付先】

・Eメール office[アットマーク]c-bungei.jp 「中国文芸研究会会報」原稿であることを明記する。

(〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

大阪大学箕面キャンパス青野研究室気付 中国文芸研究会事務局宛)

* 投稿がなくて担当者が苦勞することも多かったが、現在は連載原稿があるほか、今年度4～8月号は『野草』および夏期合宿の特集関連の記事の投稿があり、充実した紙面となっている。投稿者各位に深く感謝するとともに、引き続き活発な投稿を、会員諸氏にお願いしたい。

*会報担当者は、十数名の担当で分担して仕事をする、という点が、ほかの事務局の係りとは異なっている。各地に散らばりそれぞれ多忙な各担当が、話し合ったり、共通認識をもったりすることは容易ではないが、1月例会日の午前中に行う「会報担当者懇談会」での話し合いほか、随時意見交換を行って、今年度も係りとしての責任を果たしてゆきたい。

(3) 「例会」開催 (担当：濱田)

*「例会」開催数は、年間10回とする(2月、8月は例会を行わない)。月の最終日曜日午後1:30より開会することを原則とする。12月は忘年会を兼ねるため、日時は別途定める。

*講演(会員外・他領域・外国人研究者などを含む)・書評を年間各1回程度、『野草』関連報告を数回組み入れる。『野草』合評会(9・3月例会)の討論内容は、次号の『野草』誌上の合評記に反映する。論文執筆者は合評会に出席することを原則とする。

*「例会」担当は濱田麻矢(office[アットマーク]c-bungei.jp)とし、例会の企画と報告希望者の調整を行なう。調整の必要から、希望者は早めに申し込むことを望みたい。コメントーターについては報告者の申し出があれば検討する。

*会場は、偶数月は同志社大学(京都会場)、奇数月は関西学院大学大阪梅田キャンパス(大阪会場)とする。ただし、状況に応じて会場は変更になる可能性があるため、研究会のウェブサイトをチェックされたい。会場予約は阿部範之(同志社大学)・藤野真子(関西学院大学)、二次会会場予約は京都=鳥谷まゆみ、大阪=大野陽介が担当する。

*すでに決定している「例会」内容(例会カレンダー)は以下の通り。現在空いているのは11月と1月のそれぞれ一枠ずつである。

4月28日(京都) 講演 吉川良和氏(中国芸能研究家)
「中国非文字文化としての芸能研究」

5月26日(大阪) 牧陽一
松田郁子

6月30日(京都) 北岡誠司
張文菁

7月28日(大阪) 田村容子
米井由美

8月 不開催

9月29日(大阪) 『野草』92号合評

10月27日(京都) 山本律
杉村安幾子

11月24日(大阪) 川田耕

12月 (京都) 書評(未定)

1月26日(大阪) 及川茜

2月 不開催

3月30日（大阪） 『野草』93号合評

(4)「夏期合宿」（担当：大東・城山）

*夏期合宿は、集中的な研究・交流の場として極めて重要である。今年度から大東和重・城山拓也を担当者とする。

*8月26日～28日（2泊3日）に行う予定。詳細は「会報」および「ウェブサイト」掲載予定の案内を参照のこと。

(5)「書評の会」（担当：松浦）

*今年度も、偶数月（京都会場）の例会前（午前10時半頃開始）に開催する。研究活動への反映の仕方についてはさらに検討を続けてゆく。具体的な書評対象については、会報またはウェブサイトで確認していただきたい。

(6)「映画の会」（担当：菅原）

*今年度においても、東アジア映画研究関連書籍やイベント等の話題に目をむけつつ、映画の会の活動を、『野草』をはじめとする文芸研の諸活動に有機的に結びつけていけるよう、模索する。

*開催スケジュールは現在のところ流動的で定型化されていない。今後の開催方針については前年度に引き続き検討していく。

*「映画の会」は映画研究に興味をもつ会員有志の集まりであり、すべての会員に開かれている。情報交換にはメーリングリストが利用されている。映画の会メーリングリストへの参加を希望される方は、菅原会員までご一報願いたい（メールアドレス:yoshino24[アットマーク]nifty.com）。また過去の開催内容については、文芸研ウェブサイトを参照されたい。

(7) 40年代文学“漂泊”研究会（担当：濱田）

*基盤研究（B）「漂泊する叙事 1940年代中華圏における文化接触史」も最終年度を迎えた。1940年代という流亡と離散の時代を、文化接触史の立場からとらえ直すことを目標として活動を行っている。今年度は二つの国際シンポを企画している。まず、8月3日から二日間、名古屋にて「大分裂時代的叙事」と題したシンポジウムを行う。去年の「戦争と女性」を承けるもので、日本・中国・台湾・香港・マレーシア・シンガポールの研究者の参加が決定、現在細部を詰めているところである。

もう一つは11月16日、17日に北京での開催を予定している「1937-1952：漂泊・衝突・融合（仮題）」。北京大学中文系と中国社会科学院との共催によって、日中の研究者を中心に四十年代を中心とした文藝が孕んでいた多様な可能性とその行方について討議する予定である。

いずれも、日本側の報告者には全て文芸研のメンバーを予定している。科研終了後も海外の研究者との継続的な連携を図るため、「中国文芸研究会」の主催とする。

(8)「特別事業」計画（担当：宇野木）

*会員からの企画を募集する。積極的な提起を強く要望する。

*本研究会編『図説・中国 20 世紀文学』（白帝社、1995 年初版・98 年再版）は、在庫切れ状況にある。原典を講読しつつ現代文学史を学ぶことができる教材は他に類を見ないこともあり、改訂版ないし新版の刊行の声も寄せられている。出版社との交渉を開始し、企画化を進める。

（9）「野草ネットワーク」（担当：青野・菅原）

*コンピュータ・ネットワークを利用した『会報』『野草』編集作業の効率化は定着した。コンピュータ・ネットワークは事務の効率化に留まらず、遠隔地との交流や種々の情報提供・発信手段として、不可欠のものである。レンタルサーバーによる運営も定着したので、新たな展開が期待される。担当は青野繁治・菅原慶乃とする。

*『野草』掲載論文の検索を始め、本研究会に関する様々な情報を発信している「中国文芸研究会ウェブサイト」（<http://c-bungei.jp/bungei.shtml>）を、さらに充実させていく。

*設置された「交流データベース」（<http://c-bungei.jp/koryu/koryu-db.html>）と事務局 ML の連携がうまくゆくように工夫する。

*「野草 ML」（加入手続＝事務局までメールでアドレスを知らせること。手続が完了すると担当者からそのアドレスに通知がなされる）を活用した会員間の交流にも期待したい。論文・著書などを発表した際には、その情報の提供を是非ともお願いしたい。

*事務局アドレス宛のメールを事務局MLに転送する作業は、前年度に引き続き、菅原・鳥谷の複数担当制で行う。

2 運営体制について

*研究会の運営は、事務局と『野草』編集委員会によって行う。

（1）事務局

*事務局は、総会決定に基づき研究会活動の日常的な実務を担当する。事務局構成メンバーと担当は以下の通り。

青野繁治（ML サーバ管理、メルマガ）・阿部範之（京都会場予約）・井上薫（会報）・今泉秀人（普通口座）・上原かおり（会報）・宇野木洋（特別事業）・小笠原淳（会報、『野草』95 号編集担当）・大東和重（夏期合宿）・大野陽介（メール便大阪、会報、大阪会場二次会予約、『野草』97 号編集担当）・河本美紀（会報）・北岡正子（代表、『野草』編集常任）・絹川浩敏（『野草』編集常任）・工藤貴正（『野草』編集常任）・黄英哲（海外交流）・斎藤敏康（『野草』編集常任）・佐原陽子（会報）・城山拓也（『野草』93 号編集担当）・菅原慶乃（映画の会、ウェブサイト管理）・谷行博（『野草』編集常任）・田村容子（会報、『野草』94 号編集担当）・津守陽（会報）・鳥谷まゆみ（京都二次会場予約、外部メールの ML 転送、『野草』96 号編集担当）・豊田周子（会報）・永井英美（会報編集リーダー、メール便京都）・中野徹（会報、『野草』92 号編集担当）・羽田朝子（会報）・濱田麻矢（例会）・平坂仁志（版下）・福家道信（『野草』編集常任）・藤野真子（会費、名簿管理、振替口座、会場予約）・松浦恆雄（書評の会、事務局長）・三須祐介（会報サブリーダー）・弓削俊洋（『野草』編集

常任)・好並晶(海外、書店)・和田知久(会報)。

*事務局の住所は以下の通り。

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1

大阪大学箕面キャンパス 青野研究室気付

(2) 『野草』編集委員会

*『野草』編集委員会は、常任委員(『野草』編集担当経験者など)、編集担当、及び編集担当が事務局構成員を中心とする会員から選出した編集委員若干名により構成される。

*『野草』編集委員会は、『野草』の編集と刊行に責任を持ち、投稿論文の査読を手配する。また「原稿審査(査読)」のあり方、『野草』の編集・投稿規程の策定などを含む中・長期的な課題について検討する。

*『野草』編集委員会は、編集担当が必要に応じ事務局と相談し招集する。

(3) 会計監査

*財政の健全な執行を図るべく会計監査を置く。会計監査は岡田英樹とする。